

忘却された「防共桜」の植樹をめぐって

—多摩川浅間神社の桜と日独文化交流—

安 松 みゆき

【要 旨】

戦前に日伊文化交流そして日独文化交流を目的に、イタリア使節団およびヒトラー・ユーゲントが来朝し、それを記念して多摩川浅間神社において桜の植樹式が実施された。しかしこの事業については長らく忘却されてきている。小論では、日独文化交流の考察として収集し得た関連資料より、まずこの事業を再構成し、そのうえでなぜ明治神宮などでなく多摩川浅間神社だったのか、という疑問について検討する。それによって、元々は民間から始まった桜を愛でる活動が時局のなかで政治的な役割を果たし、時代と無関係でありえない文化交流の実体を明らかにする。

【キーワード】

日独文化交流、ヒトラー・ユーゲント、防共桜、多摩川浅間神社、大多摩川愛桜会

はじめに

春になると桜前線に合わせて我々は桜の花見を楽しみ、桜を愛でる。桜への愛着とともに桜が日本を象徴することに、特に説明はいらない。東京大田区の東急東横線多摩川駅から徒歩3分程度のところに、多摩川浅間神社がある。創建は鎌倉時代と伝えられるものの¹、この地域の住民以外にはほとんど知られていないような小さな神社である。戦前に日伊文化交流そして日独文化交流を目的に、イタリア使節団およびヒトラー・ユーゲントが来朝し、その際に神社での桜の植樹式が実施されたが、その会場となったのは、明治神宮や靖国神社に参拝していながら²、この多摩川浅間神社であった。しかしそのことは、現在の神社の知名度に合わせて忘れている³。戦中の日独文化交流に関する研究は、かなり関心をもってすすめられ、ヒトラー・ユーゲントの来日については詳細な成果が見られるようになってきているものの、この事例については、管見の限りこれまで全く取り上げられていない。またファシスト来日に関する研究でも、この植樹式についてまだ関心の域には入っていないようである。イタリアとの戦前の文化交流研究は、ドイツに比べると、たとえばファシズムの建築などの紹介や、ローマでの日本美術展の開催について草薙奈津子氏等によって考察してきているだけで⁴、かなり限定されている印象を受ける。独伊の研究状況には、その度合いに落差はあるとはいえ、いずれも日本との文化交流について、まだ多くの検討の余地が残されているといつてよいだろう。小さな一神社での出来事であり、また戦前の動向そのものが長らく否定的な意味合いを持っていることが、忘却された要因のひとつである

う。

そのなかで注目されるのが、郷土史家水上市郎平氏の論文である。水上氏は、地元の桜樹の多さからフィールドワークを中心として大田区の「田園調布の桜」の歴史と現状を調査し、その結果を1982(昭和57)、1983年に「大田区郷土の会」の編集する『多摩川』14、15号に連載した。そこで水上氏は浅間神社の桜にも眼を向けて、日伊および日独親善により桜が植えられたことと、桜樹のそれ以後の状況についても短く触れている⁵。水上氏は特に1938(昭和5)年の東郷元帥の桜植樹式をこまかく紹介しているが、後述するように、今回の外交式典の本来の主催者「大多摩川愛桜会」が碑を浅間神社に残し⁶、また同会が多摩川沿岸の補強と美化のために桜を植えるために結成され、実際に4千本を植えたことも簡単に指摘した。この水上氏の紹介が私見では唯一の先行研究となる。

論者はこれまで日独の文化交流について美術動向を中心にしながら戦前から考察してきており、この出来事もその事例のひとつとして捉えたい。すなわち、小論の目的は、桜をとおした日独文化交流の一端を明らかにすることである。日本人が愛でる桜が戦前には単なる花でなかったことは、いまさらいうまでもない。丹尾安典氏、河田明久氏等の指摘にあるように、特攻隊のために日本画家横山大観が富士山と桜の絵馬を描いていることなどから⁷、多くの日本人が日常で愛でた桜が、時局のなかで国花として、そして日本人の死の象徴の役目を強く担うことになっていった⁸。また桜は占領地においても武士道の復活や植民地日本の紳士のイメージを広めることに一役買ったことが、2009年に金炫淑氏によってまとめられている⁹。本論では、元々は民間から始まった桜を愛でる活動が、時局のなかで政治的な役割を果たしていったことを、イタリアの桜植樹も参考にしながら考察し、時代と無関係でありえない文化交流の実情を明らかにしたい。その際に明治神宮等でなく、なぜ多摩川浅間神社が選択されたのかという問題についても検討する。今回のテーマに関する資料は民間が主体となっていたためか、ほとんど残されていない。わずかだが、論者は関連協会の存在を調べるなかで、この研究の唯一の資料ともいえる「大多摩川愛桜会」の機関誌と浅間神社の冊子を手に入れることができた。ここでは、それらと、当時の新聞資料などを手がかりにして考察をすすめる。

1 愛桜会とその発足経緯

都心から少し離れた多摩川沿いに浅間神社が鎮座する。戦前1938(昭和13)年の春にイタリアの青年団、同年秋にはドイツのヒトラー・ユージェントとが訪日した際に、かれらは多忙な時間をぬってこの神社で桜樹の植樹を行った。浅間神社は都内では無名に近い規模にもかかわらず、戦前に三国同盟を提携したドイツとイタリアとの交流行事を行うために浅間神社が選ばれたのは、いかなる理由によるのだろうか。

まずこの行事に関わった団体に注目してみよう。それは「大多摩川愛桜会」の名称で活動していた、桜を愛好する人々からなる団体である。前述の水上氏の指摘がかるうじてあるのみで、今では忘却されてしまっているといえる同会について、1938(昭和13)年に冊子『櫻の多摩川』が発行されていたことがわかった[図1]。その資料は2014年時点で国会図書館に所蔵されている¹⁰。頁を捲ると中表紙には、右頁に「大多摩川愛桜会」会長公爵鷹司信輔自筆の「東邦花瑞」が、左頁には「東郷元帥植樹の桜(東郷桜)」の写真が



図1 冊子『櫻の多摩川』の中表紙の「東郷平八郎の直筆写し」典拠：『櫻の多摩川』

掲載されている [図 1]。『櫻の多摩川』には同会定款と会員名簿も添付されており、管見ではこの資料が同会に関する唯一のものと思われる。そこでこの資料を参考にして、この会について以下に概説する。

1.1. 「大多摩川愛桜会」の発足

『櫻の多摩川』によれば、「大多摩川愛桜会」¹¹の設立は、田園調布に住む元軍人河田一三が高台にある自邸から多摩川を俯瞰して、その堤防の無機質さに対して桜を植えようと考え、当時の町長の天明啓三郎に話をしたことから始まったという¹²。その後、1929（昭和4）年3月7日に多摩川畔丸子園で懇談会が開催され、多摩川の兩岸の一市八ヶ町村、すなわち当時の川崎市、中原町、東調布町、矢口町、六郷町、羽田町、高津町、砧村、玉川村からの代表者によって、多摩川兩岸の堤防に桜樹を移植するための請願運動の実施を決め、同年4月10日に川崎市長春藤嘉平と関連町村一行でその意向を内務省に要望した。

多摩川兩岸への桜の移植という規模を実現するために、同会は組織の整備の必要を考え、役員会の法人化をすすめた。1930（昭和5）年4月21日には、同会を役員会で法人組織にすることを決め、翌年8月31日に認可申請の手続きを準備し、河野の提案から4年後の1932（昭和7）年1月13日に、正式に内務大臣によって愛桜会は法人組織として許可されたのであった。

1.2. 「大多摩川愛桜会」の目的

この会の目的は、定款によれば、多摩川沿岸付近の土地に公園の設備を作り、「国民保健ノ増進並ニ都市衛生の完璧ヲ期スル」ことであった¹³。桜の植栽は、その目的を達成するために、多摩川兩岸に灌木類、草花類の移植とともに美化の整備として行われることと考えられていた。しかしこの理解が単なる都市衛生などの側面に留まらなかったことについては後述する。

また、なぜ桜なのかを考えると、その理由には、第一に桜は既に日本の花と理解されていたこと、第二に桜は武士道にかかわると見なされていたことがあげられる。実際に桜の植樹式で浜口首相は、桜を「皇国の誇り」として理解していたことや¹⁴、神奈川県知事山形治郎も「我が国民精神ノ精華ヲ表象スベキ桜花」として、あるいは東京市長堀切善次郎も「桜花ハ我が国家ノ象徴トシテ古来尊重愛植」されてきたとして、桜が特別の国花として把握されていたことがわかる¹⁵。1938（昭和13）年の『朝日新聞』においても、「世界の新たな枢軸日独伊防共協定の絆を武士道精神の象徴桜花でより固く結ぼうという計画」がすすめられていることなどから¹⁶、桜が選択された背景が見えてくる。

1.3. 「大多摩川愛桜会」の会員と会費

法人化された「大多摩川愛桜会」の組織について、巻末の定款や役員名簿によると¹⁷、役員には会長1名、副会長に3名、理事、評議員、幹事に各若干名選出され、必要なときに役員会を開催するように考えられていた。会員総会は通常と臨時との2種あり、通常は毎年度開始後3ヶ月以内に実施され、そこで事業の状況や予算決算の報告が行われた¹⁸。臨時会員総会は必要なときに開催されることになっていた。

実際の会員には、会員名簿を見ると、名誉会長に日本桜会会長であった公爵鷹司信輔¹⁹、名誉副会長に日本庭園協会会長本多静六が就任し、会長で理事、評議員を兼ねていたのは貴族院議員で元神奈川県知事の有吉忠一、3名と設定されていた副会長には代議士の野口喜一のみが就任していた。野口もまた理事、評議員を兼ねていた。顧問には東京朝日新聞社社長待遇とされた霜山経介、元川崎市長春藤喜平、元中原町長安藤安、海軍中將村田豊太郎、陸軍少尉鶴田義紹、東京

市公園課長井下清、東大名譽教授で田園風致協会会長脇水鉄五郎、陸軍少尉弘中暁、海軍大佐栗原祐治、川崎大師重職高橋隆超、所属不明の石井泰助の11名があがっている。幹事には、評議員を兼ねた元六郷町長代田朝義、元高津町長で神奈川県会議員の鈴木孝順、川崎市土木課長荒川龍雄、砧派出所長石崎次三郎、玉川派出所長島田条太郎、および評議員でない中原出張所長鹿島育久他の14名が就任している。評議員には若干名と定款に書かれていたが、この時点では兼任を除いても31名の名前が見られる。会員は大森区、蒲田区、世田谷区の各区長、各区の府議員、市会議員、区会議員、川崎市長、県会議員、五十円以上の金品寄贈者、そして本会評議員会で推薦された者からなり、1938（昭和13）年の報告によれば、会員数は当時約400名に達していた。収入は寄付金と関係市区の補助金が主で、たとえば1937（昭和12）年には川崎市から600円、世田谷区と蒲田区からそれぞれ300円、そして大森区から200円の寄付が集まっていた²⁰。事務所は、大森区役所調布派出所に置かれていた。

こうした会の顔ぶれからは、その多くが桜を植樹する多摩川沿いの自治体関係者などによることが確認できる。また上層部にも名誉会長鷹司と副会長本多、顧問井下以外の顧問は皆多摩川沿いの住所で届けられており、植樹対象地区の住民であることがわかる。とはいえ、要となる名誉会長に鷹司公爵を任命し得たことは大きいだろう。鷹司は多摩川からそれほど遠くない目黒区に住まっていたとはいえ、公爵の身分でなお日本桜会の会長だったためである。

1.4. 「大多摩川愛桜会」の初の活動

同会の初の活動は、まだ「大多摩川愛桜会」が法人化される前に認められ、1930（昭和5）年3月15日の桜樹の植樹であった。しかもその植樹が実施された場所は、浅間神社であった。その際に当時の内閣総理大臣浜口雄幸、神奈川県知事山形治郎、東京市長堀切善次郎、横浜市長有吉忠一、大多摩川愛桜会会長公爵鷹司信輔、日本庭園協会会長本多静六からの祝辞があったという。さらに記録を見ると、東郷平八郎自ら植樹し、浜口の祝辞には「東郷元帥をして桜樹植栽の盛式を」実施したことが書き留められている²¹。ただし現在の浅間神社によれば、実際に東郷が植樹したのかは定かではない。

以上のように、当初は個人レベルではじまった多摩川沿いの堤防に桜を植栽する話から、広域の自治体との関係で、早くから政治家および日本桜会会長鷹司公爵を巻き込んで「大多摩川愛桜会」が組織されていったことがわかった。そして同会がはじめて桜を植樹したのが浅間神社であった。この行事にはまだ法人化の許可が出ていないにもかかわらず、当時の内閣総理大臣浜口からも祝辞が寄せられ、さらには「日本精神の権化」と当時讃えられた²²東郷平八郎自らが植樹するという豪華な演出も繰り広げられたのである。ただしこの時点ですでに浅間神社が登場しているものの、その理由について言及されていない。

2 「大多摩川愛桜会」の文化交流 イタリア使節団とヒトラー・ユーゲント

次に具体的な「大多摩川愛桜会」の国際的な文化交流について、当時の新聞記事を資料に加えながら確認する。

2.1. イタリアに桜苗、ドイツに桜種を寄贈

多摩川への桜樹の植栽には、住民たちの健康のため²³、そして多摩川の堤防美化のためという目的があった。特に注目されるのは、外国に向けて考えられた多摩川沿いの桜植樹だったことである²⁴。

そして実際に同会の活動を外国に伝達する機会に2回も恵まれた。一回目は1937（昭和12）年春で、イタリアとドイツに桜苗を寄贈することになった²⁵。これは単純な文化交流でなく、「防共の大義を強調し」とあるように²⁶、時期的に政治的な意味合いを一部持ち合わせた行事となったが、実際に計画してゆく途中で、日独伊三国間で防共協定が実際に提携されたことによって、この計画も「大多摩川愛桜会」からでなく、「帝都大東京」で実施されることに変更された。

具体的にイタリアの場合、桜苗はローマにもたらされ、「日本通り」と名付けられた道路の街路樹として植栽されることになった²⁷。ドイツの場合には、当初、1千本の桜苗を寄贈するつもりだったが、輸入における害虫の問題で困難な回答を得たために、苗でなく種子を分けることで快諾されたという²⁸。

そして両国のために1938（昭和13）年1月22日に盛大な贈呈式典が催された。日比谷公会堂を会場に東京市理事、独伊両国大使、「大多摩川愛桜会」会員、一般東京市民、在京独伊国民が参加した。日独伊国歌を斉唱し、東京市長から目録が贈呈され、両国代表が謝辞し、そして「大多摩川愛桜会」会長有吉が祝辞を述べた。

三国同盟の記念もあり祭りムードとなって盛り上がり、三国交歓音楽舞踊映画も上映された。そして式典後、東京朝日新聞ではこの桜贈呈を記念して全国の小学生から「さくらの歌」を募集し、東京の三年生の男子学生と、北海道の六年生の子学生が作成した二作品が入選し、文部省検定済みの小学校唱歌教科書に再録されたという²⁹。

2.2. イタリアとドイツによる多摩川浅間神社での桜植樹行事

2.2.1. イタリア・ファシスト訪日親善使節団の桜植樹 [図2]

「大多摩川愛桜会」の外国に向けたさらなる活動が、イタリアの使節団とドイツのヒトラー・ユーゲント来日で行われた実際の桜樹の植樹行事であった。

時系列に見てゆくと、まず1938（昭和13）年3月19日に、「イタリア政府派遣のファシスト訪日親善使節団」と表記されたイタリア使節団による植樹が最初に行われた。この動向については、『櫻の多摩川』に詳しく書かれている。それによると、多忙な来日日程で動いており、外務省からは様々な追加日程を断っていたイタリア親善使節団22名に、有吉「大多摩川愛桜会」会長で横浜趣向会議所会頭が桜の植樹を直接同団長に申し入れたという。それに対して団長パウリッチ侯は、桜の植樹に対して「斯かる意義深い行動は、何を繰り合わせても実行せねばならん。それがファシショ精神である」との言葉とともに即諾し、そして帰国前日に実施することに12日に決定したとされる³⁰。1938年4月16日（土曜日）午前十時半に、帝国ホテルを出発した親善使節団の一行は田園調布に向かい、桜樹植樹式を執り行った。当日を再現すると、午前9時半に大多摩川愛桜会を代表して川崎、大森、蒲田の会員を乗せた自動車が、一行を迎えに帝国ホテルに向かった。式典会場となる浅間神社の丘の下には、中原高等女学校と東調布高等家政女学校の生徒、東調布各小学校児童、愛国婦人会員、国防婦人会員、青年団員が集まり、在郷軍人会員が交通整理や警備にあたっていたという。生徒たちは歓迎するために、その後丸子橋から北東に向かう街路に並ん



図2 イタリアファシスト使節団による多摩川浅間神社での桜植樹式
典拠：『読売新聞』
昭和13年4月17日

だ。歓迎ムードはさらに高まり、西に富士山が見える晴天の空のなか、10時半に陸軍機が歓迎のために南方から飛来し、浅間神社上空をとって北方に飛び去っていったという。式典は大掛かりなものであり、かなりの盛り上がりを見せた。

午前11時26分に、团长パウリッチ侯、国防国民軍代表カナリー将軍、アウリッチ駐日イタリア大使等が、小川外務書記官、馬渡海軍少佐の案内で、浅間神社に到着した。浅間神社境内前で車から降りると歓迎の花火が鳴り響き、小旗を翻しながら民衆の歓迎の聲が高鳴ったとされる。一行を神社の階段下で出迎えたのは、本会副会長で代議士の野口と同副会長天明、大森区長岡崎、蒲田区長三宅、世田谷区長入江、その他の関連市区会議員たちで、一行と握手を交換した。府立第一商業学校の学生が伴奏し、中原高等女学校等の学生が、イタリアの国歌を斉唱した。それに感動したイタリア使節団は「ファッショの礼で右手が高く揚げられ、また出迎えた人々も喜び「感動の嵐だ！」となり、「世界確信に奮闘する日伊両民俗の赤熱的交歓」になったという³¹。

地元町会長の弘中陸軍少尉と栗原海軍大佐が、案内役として浅間神社前に使節団を誘導し、パウリッチは神社に礼拝し、禊を受けて玉串をささげた。社殿に用意された桜4本を、東郷元帥が植初で使ったシャベルでもって、「ムッソリーニ桜」、「チアノ桜」、「パウリッチ桜」、「ストラチエ桜」と命名されて植えられた。この4本の桜は、「永久に日伊親善の花を咲かせ」、「ジョウイネツア（青春）のシンボル」として、野口副会長によって紹介された³²。八重桜の花束を、振り袖で着飾った地元東調布第二小学校第二年生の宮部千恵子、平本遼子、長門壽子、松野和子の4名が使節団に贈呈した。一行は「花きれいですネ、子供さん可愛いですネ、良い娘さんになります」などと連呼し、振り袖を着た女子の頭をなでたあと、沿道の観衆と握手をし、愛国行進曲などを口ずさんだという³³。岡崎大森区長が「伊太利国、ムッソリーニ首相、訪日親善使節団万歳！」と連呼し、パウリッチ团长からも「大多摩川愛桜会万歳！」そして「日本万歳！」が連発されたとされる。一行は、その後多摩川園内の休憩場で紅茶を飲み、洋菓子を食し、遊園施設を見回って、午後0時21分にホテルに戻った。

『櫻の多摩川』によれば、後日この桜樹記念植樹に対して、イタリア使節団の一行は来日のなかでも心に残る出来事として話したという。その後一行が九州に向かい、別府も訪問した。ちょうど別府に到着したときに、新聞においてパウリッチ团长が日本での思い出として、森厳と神々しい伊勢神宮の参拝とともに浅間神社で記念祝樹したことをとりあげて、「東郷元帥の由緒あるシャベルを使って」植樹し、それぞれムッソリーニなどと名付けられた桜のことを、日伊の親善の密なる関係の証としてムッソリーニにも伝えると報道されたという³⁴。なお私見では、これにあたる記事に上記の内容は記載されておらず、正確なところは不明である。

いずれにしても多忙を極めたイタリア使節団は、桜に大きな日本の文化的な意味を見出して、その植樹にも文化交流の意義を確信したことが、浅間神社での行事を実現することになったのである³⁵。おそらく日本側では、このイタリア使節団での成功が、多摩川浅間神社での桜樹記念植樹に外交戦略の意義を確実に見出し、それによって次のヒトラー・ユーゲントに繋がったと推察される。

2.3. ヒトラー・ユーゲントの桜植樹 [図3]

次にドイツのヒトラー・ユーゲントによる桜の植樹についてだが、この動向に関しては、前述したようにヒトラー・



図3 ヒトラー・ユーゲントによる多摩川浅間神社での桜植樹式
典拠：『読売新聞』昭和14年9月21日

ユーゲントの訪日を詳細に研究している中道寿一氏の論究のなかでも指摘されておらず、また『櫻の多摩川』にもイタリアについては詳細に記録されているが、ドイツについては植樹した史実に言及したのみで、その内実は見過ごされている。そこで新たに入手した当時の『東京朝日新聞』『読売新聞』、多摩川浅間神社の冊子『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』（1939（昭和14）年刊行）を資料としながら、イタリアの時のように細やかに再現できるほどの情報は不足しているが、ヒトラー・ユーゲントの桜の植樹式について振り返ることとする。

2.3.1. ヒトラー・ユーゲントの桜樹の植樹式

1938（昭和13）年9月20日、8月中旬に来日したヒトラー・ユーゲントは³⁶、雨のなか芝の高輪小学校を見学した後に³⁷、9時40分にシュルツェ隊長とローター、コルマースの隊員がオット・ドイツ大使とともに浅間神社を訪れて、「大多摩川愛桜会」の招待による桜植樹記念式典に臨んだ³⁸。イタリアの時と同様に、地元の中学生や小学生、大森、川崎市の各団員、愛桜会会員など数百名が歓迎し³⁹、「大多摩川愛桜会」会長有吉忠一、目蒲電鉄社長五島慶太、岡崎大森区長らが出迎えた⁴⁰。そして、神前に玉串を捧げたうえで⁴¹、オット大使が「ヒトラー桜」を、シュルツェ隊長が「ヒトラー・ユーゲント桜」を、東郷元帥やイタリア使節団の使用したシャベルを用いて植樹したとされる⁴²。すでにイタリア使節団のパウリッチ侯が「ムッソリーニ桜」を植樹していたため、新聞には「ここに三国防共桜が完成した」と報じられた⁴³。この記事によって、この行事は、軍事的、政治的な意味合いを決定的なものとした。

行事としては、イタリアの時と同じように、植樹のあとに振り袖姿の東調布第二小学生の宮部千恵子さんと平本さんから日独両国の旗をヒトラー・ユーゲントに贈呈し、10時30分には3人のヒトラー・ユーゲントは他の同僚たちが訪問している大森区山王の「独逸学園」の歓迎会に向かったという⁴⁴。

この行事は約一週間前の9月14日の『読売新聞』に「防共桜の園を設ける」として事前に公表されており⁴⁵、それなりに期待されていた。最終的に「東郷元帥桜」、「ムッソリーニ桜」、そして「ヒトラー桜」が揃った浅間神社では、翌年4月23日に、日独伊三国少年代表が防共桜彌栄施肥をしたあと、三国少年が交換運動会を多摩川河畔の川原で行ったという⁴⁶。

2.3.2. 多摩川浅間神社の桜植樹の場をめぐって

さて「防共協定桜」と呼ばれた桜の植樹だが、現在では浅間神社のどこに実際に植樹されたのかは、同社に問い合わせても不明との回答である。たしかに当時の新聞にも浅間神社境内とのみ記載されているだけであり、わずかに新聞に掲載された写真から、鳥居の横で植樹が行われていることがわかるのみである。ところが前述した郷土史家水上氏は、1983年の時点で、その場所と現状を指摘している。水上氏によると、それは社務所の前鳥居のそばという。そこには「東郷元帥の桜」があり、その近くに「ムッソリーニ桜」と「ヒトラー桜」が植えられていたらしい⁴⁷。たしかに今回浅間神社宮司の北川憲史氏より提供を受けた昭和14年刊行の冊子で、前述の『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』を参考にすると、その場所である可能性が高い。同冊子によると、当時、境内1400坪が東京府の計画で風致地区景観の改善施設として改善されることになり、併せて社務所が造営されることになった。それに続いて当時の社務所の位置に関する言及があり、「丘陵の中腹、現神職住宅の前方、防共桜を庭先に見る場所とする。そして社務所からは清流多摩川が眼下に見られ、・・・（中略）・・・霊峯富士を其の正面に仰ぐと書かれているのである⁴⁸。つまり、防共桜は、丘上の社殿ではなく、中腹の神職住宅、すなわち社務所の前方だったことになるのである。また前述した当時の新聞の写真図版を詳しく見る

と、周囲は平坦で、植樹は鳥居のすぐ脇で行われていたことが理解される⁴⁹。現在の社務所は上記の指摘どおり、本殿が丘陵の頂上に建つものに対して中腹にあり、社務所からは下に多摩川、正面には富士を眺めることができる。浅間神社には現在鳥居が頂上に2基、中腹に2基建ち、そのうち1基が、銘文によって1849（嘉永2）年に造営されていることがわかる⁵⁰。ただし、同神社が戸外に展示している大正時代の絵はがきからは、中腹から頂上へと上がる階段の位置が現状の直線ではなく、数段が直線で迂回するものであったため、昭和の時代もそのような状況にあったと推察される。

したがって、これら事情を総合するならば、おそらく植樹された場とは、水上氏も指摘しているように、現在社務所が建つ中腹の鳥居の近辺だったと考えられる。前述のごとく社務所では、植樹後の桜の行方について不明としているが、水上氏はそれについても述べており、終戦後には、一本の山桜を残して桜樹をすべて伐採したことを当時の宮司より語り聞いている。現在、第一の鳥居と、社務所入口正面に桜樹が認められる。水上氏の指摘を支持するならば、植樹から80年強も過ぎた年月に合わせて幹の太さを勘案すると、社務所前の植えられている松の大木右の桜樹に、防共桜のいずれかの可能性が想起される。

3 多摩川浅間神社が選択された要因

前述したように本来は無機質な川の堤防を憩いのある場にしようとする考えから出発して、その後国民の保健や都市衛生の立場からの理由付けがなされていったのが、桜の植樹の発端となった。その初めての植樹が行われたのが多摩川浅間神社であり、そうした活動の象徴として役割が浅間神社に与えられたといえる。

しかし、それがいつのまにか政治的な意味付けがなされ、国家レベルともいえるイタリアとドイツとの間の桜植樹式が浅間神社で実施された。そのような行事が多摩川浅間神社で行われたのは、いかなる理由によるのだろうか。

3.1. 「大多摩川愛桜会」の理想

まず、日独伊の同盟国での行事として、桜の植樹式が行われたことから考えてみたい。その理由は『櫻の多摩川』に探ることができる。定款には、国民の健康や都市の衛生を鑑みて、多摩川沿岸に桜を植樹することが目的として唱われているだけで、そこには政治的な関与を想起させる文言は書かれていない。

しかし、『櫻の多摩川』の本文での解説には、同会が法人化ともあいまって、多摩川沿いの住民の単なる鑑賞だけでなく、「各国人に紹介して世界萬邦との協和達成に貢献せんとする」という広大な理想が書かれているのである。つまり、当初より「大多摩川愛桜会」の組織は、ある地域の活動に限定せずに、国家的ともいえる役割を設定しており、早くにその活動に地元の鎮守である浅間神社が、一役買ったこととなる。浅間神社の参道には、同会の記念石碑が置かれたことも、その役割を裏付けてくれるだろう。なおこの記念石碑は現存している [図4]。



図4 大多摩川愛桜会記念碑
筆者撮影

3.2. 浅間神社の由来と桜

次になぜそれほどの規模の行事の場が多摩川浅間神社だったのか

を検討する。神社の規模からすれば、東京中心には、たとえば明治神宮や靖国神社、湯島天神などがあり、また客人達も実際に明治神宮に参拝に行っていた。それにもかかわらず大田区の片隅の多摩川浅間神社が選ばれるには、それなりの理由があったことはまちがいない。

その理由として第一に考えられるのは、浅間神社が桜の由来を持っていたことである。浅間神社でも当時の桜植樹式を大きな行事として書き留めた『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』によれば⁵¹、「後鳥羽天皇の文治年間、源頼朝の寵臣葛西三郎清重が多摩川の清流を隔てて、遥かに富士の霊峯を仰ぐ景勝比なき、亀甲山の邊りの丘陵地を下して神社を創立し」とあり⁵²、永久の「武運」を祈って同神社は造られた。そして同神社の祭神は、孫瓊々杵尊の妃、木花開耶姫命で⁵³、桜の花にちなむ神であった。そのため桜の花が今でも社紋となっているように、浅間神社は元々桜に深く結びついた神社なのである。

3.3. 憩いの場であった浅間神社

浅間神社が選ばれた第二の理由として、多摩川浅間神社のすぐ目の前に娯楽施設「多摩川園」があり、当時浅間神社界隈は憩いの場であったことがあげられる。1925（大正14）年に、宝塚の遊園地を手本に、田園都市開発のなかで地盤の弱い場所に「温泉遊園地」として多摩川園が開園した。『大田区史』によれば、社長は五島慶太、取締役は澁澤秀雄が就任し、知人の画家小糸源太郎などから知恵を借りて構成し、その中央に大浴場、休憩所、遊戯室、食堂を備えた本館「夢の城」が置かれ、またお化け屋敷やメリーゴーランドの他、能楽堂などもあったという⁵⁴。その繁栄ぶりは昭和初期の絵葉書から推測される。近代的遊園地として都内最古の歴史を持つ多摩川園は、当時の憩いの場であり、その目の前に浅間神社が位置していたのである。当時の『読売新聞』（1938年4月17日）によれば、実際にイタリア使節団は多摩川浅間神社での植樹の後に、多摩川園を訪れてツツジ人形を見学して月桂樹を植樹したり、休憩している〔図2〕。

3.4. 地理的に象徴的な場としての浅間神社

そして浅間神社を選出した第三の理由は、第二のそれに重なる地理的かつ美学的な利点である。当時イタリア使節団を迎えて植樹を成功したときに、有吉忠一「大多摩川愛桜会」会長が、「春の空にはいと珍しくも 秀峰富士は多摩の清流を隔てて勇姿を現す」と書き記していることに注目したい。つまり、この多摩川浅間神社は武蔵の台地の上に建ち、眼下に多摩川が流れ、さらに遠くに視線を向けると富士が見える、という場に置かれていたことが、選択された理由と思われるのである。明治神宮も靖国神社も高台でないために富士が見えるわけではなく、また湯島天神は高台に立地するものの、多摩川浅間神社のように眼下に川が流れ、視界が開けて富士を遠望することができるわけでない。

英国18世紀後半に、ギリシャ・ローマという理想への憧れから、グランドツアーが実施され、さらにそのイメージは自国に模倣、再現されて、「ピクチュアレスク」として英国式庭園が造られていったことは、よく知られている⁵⁵。その際に手本とされたのはクロード・ロランやニコラ・プッサンによるギリシャ時代を理想とする絵画であり、ギリシャ時代の建物を点在させたり、小さく人物を置いた風景画だった。

多摩川浅間神社の立地を思うと、まさにそうした動向を彷彿とする。ロランやプッサンにあたる画家は横山大観である。大観には繰り返し描きつづけた桜と富士旭日の作品がある。それは昭和の戦前に日本を象徴するイメージとなり⁵⁶、特に海外との国家的交流において大観の作品が贈呈される際には、桜と富士であったことは、当時の新聞記事、たとえば1938年4月10日付け東京朝日新聞の「タイカン義侠の一軸、ヒ總統へ青年團のお土産、霊峰富士に日の出櫻」を見れば、

明らかである⁵⁷。つまり富士山と桜は政治的に利用された重要なイメージであった。

浅間神社はもともと富士を尊び、秀峰とされる高台に建ち、その眼下に多摩川が緩やかに流れ、そして遠方の夕日が沈む先に富士が見える景色に、桜の花が加わることになると、まさにそうした大観の描いた絵画のイメージに近いものとなる。同地が桜と富士のイメージに結びついていたことは、当時の多摩川園を紹介する浮世絵に桜と富士が描かれていることから裏付けられるだろう [図5]。

このように、元々「大多摩川愛桜会」が世界を視野に入れた活動をもくろんでおり、それゆえに植樹の式典が計画されたのであり、また東京の外れに鎮座する浅間神社が一代イベントの場として選択されたのには、元々浅間神社が桜の花に由来し、浅間神社前には当時の娯楽場であった多摩川園があり、にぎわう場であったこと、そして桜と富士を一望できる、いわゆる日本を美的に象徴するような場であったためと想定し得る。



図5 山本松谷《玉川の里観桜の図》
明治初年

典拠：『大田区史、下巻』大田区史編
さん委員会、同成社、平成8年

終わりに

戦前の日独伊文化交流の一事業として、桜の植樹が多摩川浅間神社で実施されたことに対して、なぜこの小さな神社だったのかという疑問からはじまって検討してきた。それによって、多摩川浅間神社の位置的な特徴とともに、元々は近隣住人たちが無味乾燥の多摩川の川岸に桜を植えるために「大多摩川愛桜会」が結成されていたことに深くかかわったことが確認できた。つまり「大多摩川愛桜会」は、時代の流れのなかで、国家的な文化交流に加担することになったのである。

川縁に桜樹を植樹する計画は、多摩川以外にも当時荒川放水路にあったそうだが、それはすぐには実現しなかったという⁵⁸。それに対して多摩川で実現し得たのには、多摩川が地理的な面から東京、神奈川と広域な性格を持つことで、関係者も必然的に地区を超えて早くから東京市、神奈川の広域の市長までが名を連ねたことがあげられるだろう。そして、やはりそこには「桜」と関わる多摩川浅間神社の存在に大きな意味があった。また史実か否かは現時点では確認がとれないものの、東郷平八郎が植栽したという軍事的な結びつきが若干ながら見られることも見逃せないだろう。

現在でも春になると、多摩川浅間神社から上流に向かって川岸の桜並木が花を咲かせている。これらの桜も「大多摩川愛桜会」によるものであり、それはまた戦争へ突き進む時代の流れのなかで、単に愛でる桜ではいられなかった浅間神社の植樹際との関係を持っていたことを、時代を超えて無言で我々に伝えてくれる重要な記念碑なのである。

謝辞

多摩川浅間神社宮司北川憲史氏より貴重な資料を提供いただいた。ここに感謝申し上げます。

注釈

- 1 創建は文治年間と伝えられ、その経緯は北条雅子による説（『多摩川浅間神社』宮司北川憲史著パンフレットおよび神社案内板）と、頼朝の寵臣葛西三郎清重による説（浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』昭和14年、7頁）と諸説ある。現在は前者が支持されている。
- 2 イタリア使節団は、明治神宮を参拝し、第三鳥居の参道そばに榊を植樹したことが1938年3月21日に伝えられている（『朝日新聞』1938年、3月22日）。
- 3 たとえば、以下を参照。中道寿一『ヒトラー・ユーゲントがやってきた』南窓社、1991年。佐藤卓己『ヒトラー・ユーゲントの来日イベント』『戦時期日本のメディア・イベント』（津金澤聰廣・有山輝雄編著）世界思想社、1998年、53-70頁。中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？ 規律と熱狂、あるいはメカニカルな美』南窓社、1999年。中道寿一『ヒトラー・ユーゲントと日本』『日独関係史、1890-1945、3（体制変動の社会的衝撃）』（工藤章・田嶋信雄編）、東京大学出版会、2008年、141-190頁。両者は、ヒトラー・ユーゲントの来日を詳細に扱って紹介している。だが、いずれにも多摩川浅間神社での桜の植樹についての説明はない。ヒトラー・ユーゲントの来日時の地域での交流や、学校訪問については、若干調べられているが（きむらけん「下北沢にきたヒトラー・ユーゲント」『WILL 総力特集 戦争の記憶』93号、2012年、242-249頁、石出みどり「ヒトラー・ユーゲントがお茶高にやって来た —学校史資料を使った世界史の授業」『歴史地理教育』758号、2010年、62-67頁。新宮謙治「ヒトラー・ユーゲントと独協学協会中学校」覚書『独協経済』77号、2004年、51-63頁）、しかしそこにも浅間神社の桜の植樹は言及されていない。多くの便乗イベントがあったとされるので（佐藤卓己、前掲論文64頁）、浅間神社でのイベントもその一部と考えられたのかもしれない。
- 4 たとえば日伊文化交流では、『日伊文化交流の全貌』美研インターナショナル、1998年。また、ローマでの日本美術展について、草薙奈津子「羅馬開催日本美術展について」『「帝国」と美術 - 1930年代日本の対外美術戦略』（五十殿利治編著）、国書刊行会、2010年、89-148頁、がある。
- 5 水上市郎平「田園調布の桜（二）」『多摩川』15号、1983年春刊行、24-25頁。
- 6 愛桜会を記念して「愛桜碑」は、「東京朝日新聞社撰、公爵鷹司信輔顕額、従六位勲六等根岸好太郎書」によって1930（昭和5）年11月3日に建てられている。
- 7 神坂次郎、福富太郎、河田明久、丹尾安典『画家達の「戦争」』新潮社、2010年、121-122頁。丹尾安典「大東亜の富士 —都の西北より、山容を望む」『國文學、富士山ネットワーク』第49巻2号、學燈社、2004年、108-116頁。
- 8 桜と軍国主義については以下を参照。大貫恵美子『ねじ曲げられた桜、美意識と軍国主義』岩波書店、2003年。桜への関心については、たとえば桜の会が大正7年から昭和17年まで『桜』という冊子を刊行して、桜について自然科学や人文学などの様々な分野から多面的に論じていた。桜との関係は、特に文学の分野では、平安期から近代まで重層的にとりあげられてきている（『国文學、桜 - 桜花のエクリチュール』學燈社、2001年）。
- 9 金絃淑「昌慶苑『夜の花見』と『ヨザクラ（夜桜）』」『日韓近代美術史シンポジウム報告書、都市と視覚空間 -1930年代の東京とソウル』明治美術学会、2009年、21-31頁。
- 10 資料を見出したのは4年前だが、そのときには、まだ大田区立図書館にも所蔵されていた（請求番号092.9 Sa48）。なお国会図書館請求番号は519。同誌はデジタル化もされている。
- 11 大多摩川愛桜会の名前は、初めて陳情をするために当時の川崎市長春藤嘉平等連盟市町村長一行が東京駅の1、2等待合室で待っていたときに命名されたという（『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、3頁）。
- 12 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、3頁。
- 13 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、74頁。
- 14 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、13頁。
- 15 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、15-16頁。
- 16 『朝日新聞』1938年1月9日「防共の絆に桜花」

- 17 役員名簿には71名の名前、住所、肩書きが記載されている（『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、83-88頁）。
- 18 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、80頁。
- 19 鷹司信輔は、1890（明治22）年4月29日に生まれ、1959（昭和34）年2月1日に亡くなった公爵で、鳥類学者、日本鳥学会を創立し、「鳥の公爵」のニックネームでも知られたという（『20世紀日本人名事典 そ〜わ』日外アソシエーツ、2004年、1450頁）。
- 20 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、6頁。
- 21 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、13頁。
- 22 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、10頁。
- 23 浜口首相、神奈川県知事山形、東京市長堀切、横浜市長有吉の植栽式での祝辞から理解される（『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、14頁）。
- 24 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、8頁。
- 25 『読売新聞』1938年1月23日付け記事「盟邦独伊へ 桜・贈呈 けふ日比谷で」。イタリアには桜樹2千本、ドイツに桜の種子12万粒を贈ったという。その際の桜の種類は染井吉野と山桜だったとされる（『朝日新聞』1938年1月9日「防共の絆に桜花」）。また田刊行局長より、鉄道省制作のフィルム「さくら」を両国に寄贈された。
- 26 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、35頁。
- 27 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、35頁。
- 28 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、36頁。なおどの桜が選ばれたのかだが、昭和12年11月3日の『朝日新聞』「ローマに“日本通り”」によれば、ローマには、2、3年たった染井吉野と八重桜を送ることにしていたが、翌年1月9日の同新聞「防共の絆に桜花」によると、桜は染井吉野と山桜に変更されている。
- 29 『櫻の多摩川』昭和13年、36、39-44頁。たとえば、東郷央作詞の「さくらの歌」は以下のとおり。1. 日本のお国にいろいろと うれしいうれしい親切を はるばるよせて下さった 遠いドイツやイタリへ 記念のたびする桜花 2. たのしい春がきたならば 遠いお国の花そのに きれいにきれいに咲きみだれ 大和心をかをられて 咲けよ日本の桜花。日本のお国といつまでも 伸よしこよしの人たちに 精いっぱい花つけて かすみのやうに美しく 咲いてみせてよ桜花 北海道 福井綾子 1. さくらさくら 日本のさくら 遠いドイツの子供さん 花の都のベルリンで きつときれいに咲かせてね。2. さくらさくら ゆかしいさくら 遠いローマのお友達 さくらの花が咲いた時 日本の子供を思ってね。3. さくらさくら 日本のさくら さくらの花は日本の 国をあらはすお花です 平和を招くお花です。4. さくらさくら 優しいさくら さくらの花が咲く下で みんな手を取りしつかりと 世界の平和を護りませう（『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、39-41頁）。子供たちには、平和的友好国の交流と理解されていたことがわかる。
- 30 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、44頁。
- 31 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、48-49頁。
- 32 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、50-51頁。
- 33 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、51頁。
- 34 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、53-54頁。ただし、ここで指摘されている大阪朝日新聞の1938年4月20日には、イタリア使節団が別府に到着する記事はたしかに掲載されているが、浅間神社での行事への言及は全く見られない（『大阪朝日新聞』1938年4月20日「伊国使節団、泉都に着く」）。
- 35 イタリア使節団はさくらを見る機会には恵まれ、3月20日には、アウリッチ大使により、イタリア大使館の前庭で夜桜見物をしており、新聞では「さくら日本親善第一夜」と報道されている（『読売新聞』「提灯の波・歓呼沸く」1938年3月20日）。
- 36 ヒトラー・ユージェント代表団は30名だった（中道寿一『ヒトラー・ユージェントがやってきた』南窓社、1991年、93頁）。

- 37 新聞によると、室内体操場で、4人の小学生女子が、「ヒトラー・ユーゲント歓迎遊戯」を観覧し、そのあと、手芸、理科、書道、珠算等の学習状況を見学し、設備や学習程度の立派さに関心したとある（『朝日新聞』1939年9月21日付け記事）。
- 38 『朝日新聞』1939年9月21日付け記事。
- 39 『朝日新聞』1938年9月21日付け記事。
- 40 『読売新聞』1939年9月21日付け記事。
- 41 『読売新聞』1939年9月21日付け記事。
- 42 『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』1939、8-9頁。
- 43 『朝日新聞』1939年9月21日付け記事。
- 44 『朝日新聞』1938年9月21日付け記事。なお、宮部千恵子さんと平本さんがここでは、小学一年生として記されており、イタリアの時のデータとずれているが、どちらが本当かは現時点は不明。
- 45 『読売新聞』1938年9月14日付け記事。
- 46 『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』1939年、9頁。
- 47 水上前掲文、24頁。なお水上氏によれば、その桜は山桜の可能性があるという。
- 48 『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』4-6頁。
- 49 『読売新聞』1938年9月14日付け記事。
- 50 中腹の1基は、1982（昭和57）年に造られ、頂上の2基については、銘文が風化によって磨耗して読むことができない。
- 51 『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』1939年
- 52 『浅間神社の沿革と御神徳とを述べて社務所の造営計画に及ぶ』1939年、1頁。
- 53 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、52-53頁。
- 54 『僕たちの大好きな遊園地』洋泉社MOOK シリーズ Start Line 15、2009年26-27頁。『大田区史、下巻』大田区史編さん委員会、同成社、1996（平成8）年、460-462頁。
- 55 ピクチャレスクについてたとえば以下を参照。安西信一「ピクチャレスクの理論 - ギルピン、プライス、ナイトをめぐる -」『美學』40号、美学会、1989年、36-49頁。河野豊氏からピクチャレスクについて御教授していただいた。
- 56 神坂次郎、福富太郎、河田明久、丹尾安典『画家達の「戦争」』新潮社、2010年、121-122頁。
- 57 1938（昭和13）年4月10日付け東京朝日新聞の「タイカン義侠の一軸、ヒ大統領へ青年團のお土産、霊峰富士に日の出櫻」。新聞によれば、無償で自ら描くことを文部省に申し出ていたという。
- 58 『櫻の多摩川』愛桜会発行、1938年、19頁。

Kurz vor dem Zweiten Weltkrieg, März 1938, reiste in Japan die italienische Faschist-Delegation für die italienisch-japanische Kulturbeziehung, und danach September 1938 auch die Hitler-Jugend für die deutsch-japanische. Im beiden Fällen wurde die Kirschen-Zeremonie beim kleinen Sengen-Schrein in Tamagawa stattgefunden. Aber über diese geschichtliche Tatsache spricht man heute nicht mehr.

Hier wird untersucht, zuerst den Inhalt der Zeremonie, und dann die Grund dafür, warum der so kleine Schrein wie Sengen in Tamagawa, und nicht die Meiji-Schrein oder die anderen großen Schreine, als Ort der Zeremonie gewählt wurde. Durch diese Forschung wurde geklärt, daß es in Tamagawa ursprünglich die kulturelle Bewegung des Kirschen-Vereins (Aioh-kai) gab, und daß sie in der Vorkriegszeit für die enge Beziehung der Dreimächte politisch umgestaltet wurde.